1

名品

伊勢物語の古写本

古くから多くの人に愛され、楽しんで読まれてきた『伊勢物語』だが、平安時代の写本は、娯楽の対象と見なされ保存されなかったためか、残っていない。鎌倉時代になると、『伊勢物語』は、和歌をよむための典拠、つまり研究の対象となる古典文学へと姿を変えていった。そのため、重要な写本は大切に残されるようになった。

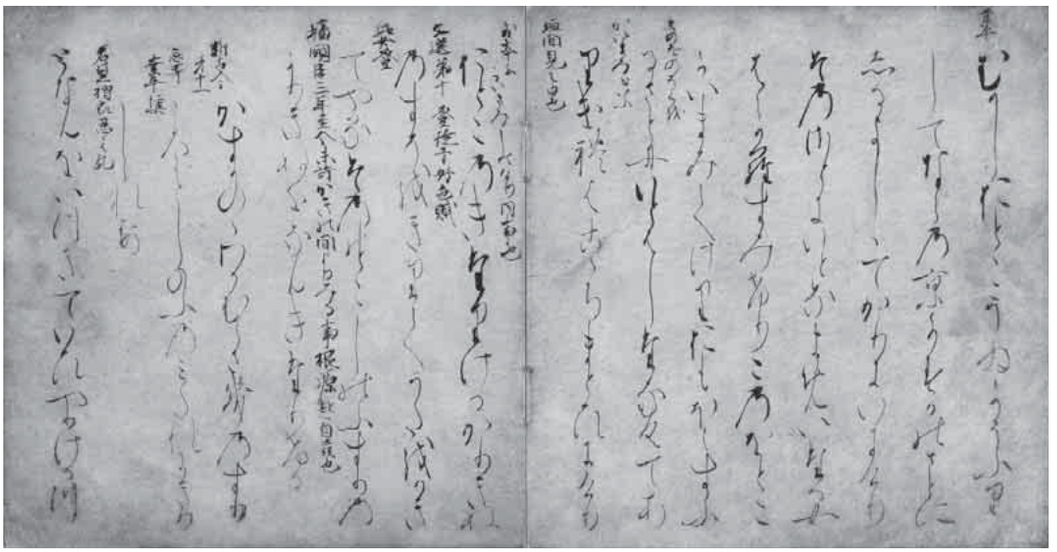
鎌倉時代の初めにはさまざまな形の『伊勢物語』があったことが知られているが、異なった種類の本の章段を巻末に補ってすべての『伊勢物語』を集成しようとする試みや、諸本の間の本文の違いを見比べて校訂する試みなども行われていた。

それらさまざまな本の中で、すぐれた歌人であるとともに優秀な古典研究者でもあった藤原定家（ふじわらのていか）が校訂した本、すなわち定家本が次第に広まっていった。現存する『伊勢物語』写本のほとんどは、百二十五の章段を持つ、この定家本に属する本である。

（山本登朗）

1 伊勢物語　伝二条為氏筆

［九八―一］
〔鎌倉期〕写
一六・〇×一五・五糎　列帖装一帖

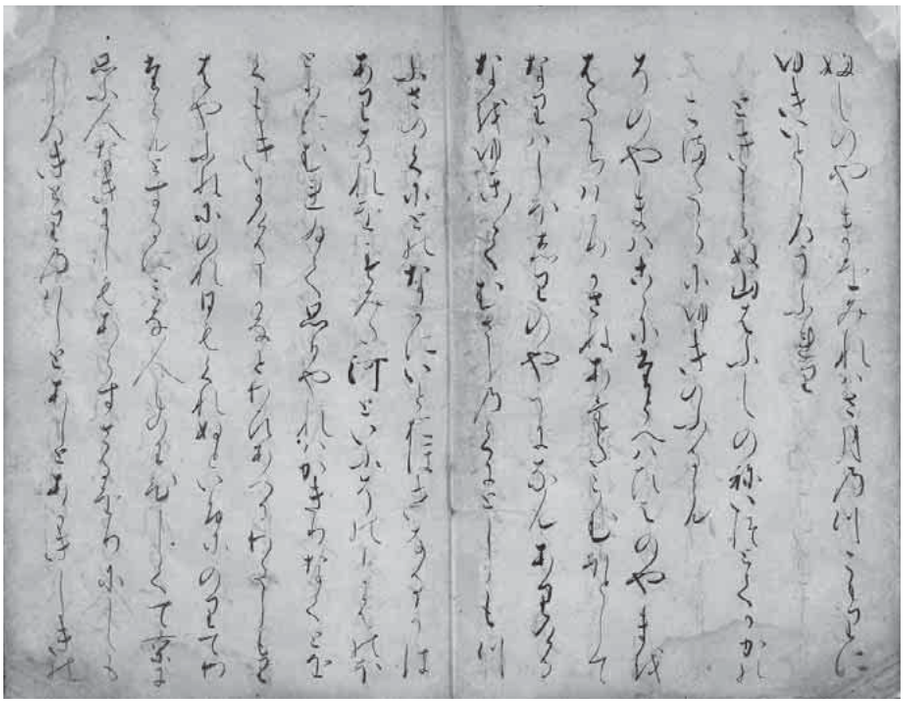


現存している最古の『伊勢物語』写本のひとつ。巻末には藤原定家（一一六二～一二四一）の奥書（根源本第二系統）が記されているが、その後に「他本」として伊勢と業平の略歴を載せている。定家本の成立や性格を考える上で重要な資料となる本。本文の行間には、定家が加えた勘物（注記）が見られるが、それ以外にもさまざまな注記が加えられていて注目される。これらの奥書・略歴・勘物・独自の注記は、『伊勢物語』の本文や内容についての初期の研究成果であり、当時の読解の姿を示すものとして貴重だが、とりわけ独自の注記は定家以外の人物が記したかと思われ、簡略だが興味深い内容を含んでいる。定家の孫で二条家の祖となった藤原為氏（一二二二～一二八六）の筆と伝えられる。図録1。

（山本）

2 伊勢物語　伝冷泉為相筆

［九八―二］
〔鎌倉期〕写
二四・一×一五・六糎　列帖装一帖

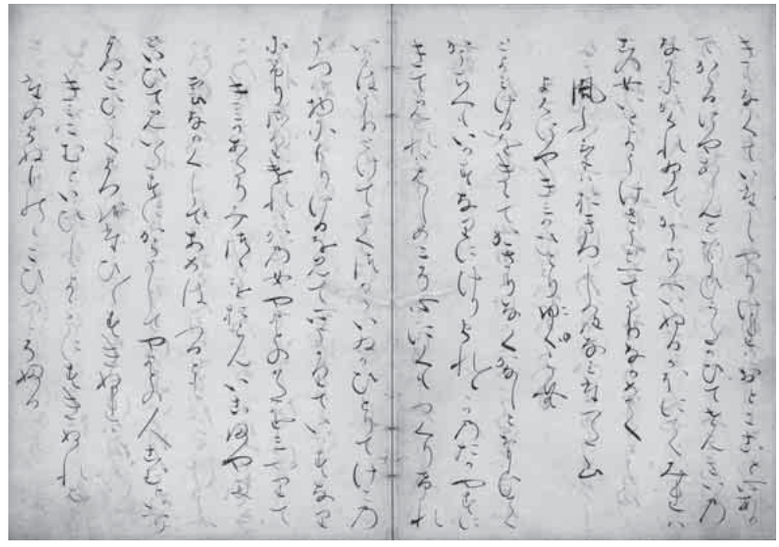


奥書は持たないが、藤原定家の孫で冷泉家の祖となった藤原為相（一二六三～一三二八）の筆とする判定書状が添付されている。定家本と同じ百二十五段本だが、第二段の「その人かたちよりは」を「その人はかたちよりは」、第九段の隅田川の場面の「さるをりしも」を「さるをりにしも」とするなど、部分的に定家本と異なった本文を有している。十三箇所に古筆として抜き取られたかと思われる欠落があるのが惜しまれる。江戸時代の学者賀茂季鷹、黒川真頼の旧蔵書。図録1。

（山本）

3 伊勢物語　伝京極為兼筆

［九八―三］
〔鎌倉期〕写
二一・三×一五・二糎　列帖装一帖

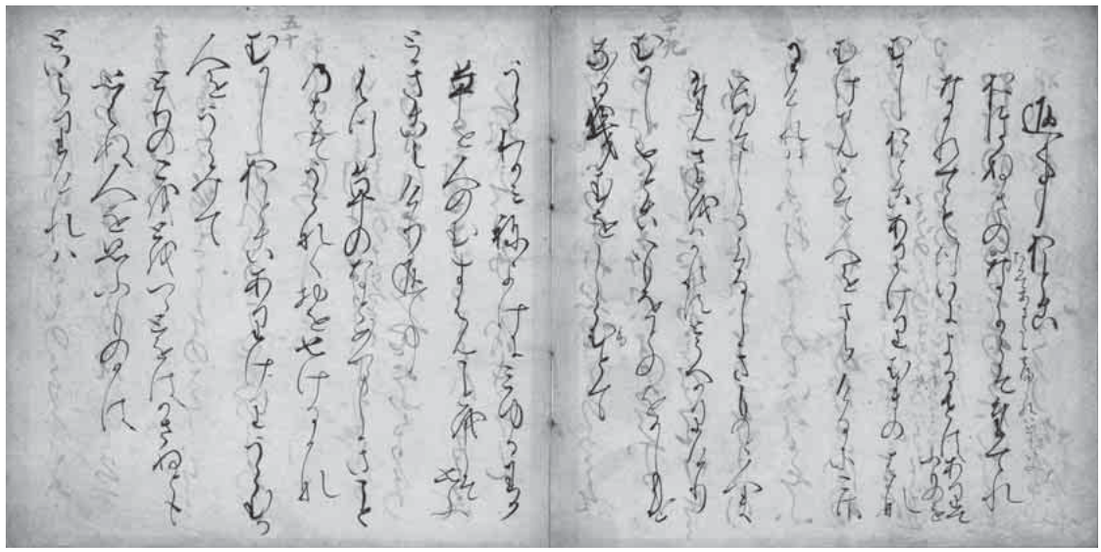


奥書はなく、巻末に業平・有常・行平の略歴を記す。本文を藤原定家の曾孫で玉葉和歌集の撰者となった京極為兼（一二五八～一三三二）の筆、外題を近衛稙家（一五〇二～六六）筆とする極札や書状が添付されている。百二十五段本だが、第二十三段の「ひとりこゆらむ」を「ひとりゆくらむ」として右に「こゆ」と傍記するなど、部分的に定家本以外の本と共通する本文も見られる。料紙一枚が欠落しているのは古筆として抜き取られたためかと思われ、惜しまれる。この本のために作られた美麗な塗り箱入り。箱蓋の「伊勢物語」の文字は烏丸光広（一五七九～一六三八）の筆、蒔絵の図柄は小堀遠州（一五七九～一六四七）作の名物茶入れ「雨宿」の蒔絵をまねたものとされている。三井家旧蔵。図録1。

（山本）

4 伊勢物語　伝二条為明氏筆

［九八―七］
〔室町初期〕写
一五・六×一五・八糎　列帖装一帖



奥書はないが、二条為氏の曾孫で為世の子の二条為明（一二九五～一三六四）の筆とする極札が添付されている。百二十五段本だが定家本とは異なった部分が多く、第四十九段の冒頭が「むかし、おとこ、いもをとの、をかしけなるきむをしらむ（傍記「ふ」）とて…」となっているなど、時頼本・最福寺本などのいわゆる古本と類似した本文が多く、また、第三十四段末尾の「おもなくていへるなるへし」がなく、行間に「あるほんにをもひくいえるなるへしといふ、又をもなくていえるなるへしともいふ」と記されているなど、さまざまな付注があって注目される。百二十五段本の性格を考える上で重要な一本である。第四段の途中から第六段の最初まで欠落しているのが惜しまれる。図録1。

（山本）